



1月21日は二十四節気の大寒。大寒を前にした17日、鹿島神宮では恒例の「大寒禊(みそぎ)」が行われ、200人ほどが「御手洗池(みたらしいけ)」に胸まで浸かり、祈りを捧げた。外気温は5度前後で平年より暖かいが、池の水温は約10度だから非常な苦行には違いない。

ところで1年で一番寒いのはいつごろだろうか。ちなみに水戸の日最低気温の平年値を上・中・下旬ごとで見ると、1月は-1.9度、-2.1度、-2.4度、2月は-2.4度、-1.4度、-0.6度となっており、1月下旬から2月上

2016.1.24



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

## 大寒

旬が最も寒い。北の太子、西の古河、南の鹿嶋などでも同じである。確かに大寒という語感にふさわしい季節感を持っている。しかし2週間もすると立春で、昼間の時間も11時間を超え、小春日和の日差しもまぶしくなるはずだ。

18日は関東地方でも雪に見舞われ、茨城県では北西部を中心に積雪があったが、鹿島灘の沿岸域では曇(みぞれ)混じりの雨で経過した。鹿島灘を渡る東寄りの風のせいだ。しかし低気圧がもう少し南を東進すれば、冷たい北あるいは北東の風となり県域全体がドカ雪となったかもしれない。今冬はエルニーニョが原因の暖冬ベースにあるが、こんな時期は、過去の統計ではしばしば「南岸低気圧」で太平洋側でも大雪となるので、要注意だ。しばらくは厳しい低温が続く見込み。水道管の凍結にご注意を。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



明日から2月。今年はうるう年だから29日までである。地球の自転は24時間だが、太陽の周りを公転して元の場所に戻るのには、ちょうど365日ではなく、その後さらに約6時間が必要。前回のうるう年から起算すると、2年目では12時間、3年目では18時間と残りが積み、今年でちょうど24時間となるので、1日を加えてうるう年となる。

4日は立春。春の気が立つ候といわれるが、24日には県北・県西などで雪に見舞われた。まだ冬の真っ最中だが、春を先取りするかのよう

2016.1.31



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

## 光の春

な陽光に注目した言葉に「光の春」がある。春の季語となっているが、気象キャスターの倉嶋厚氏がロシアを訪れた際に調べたロシア語の和訳であり、「まだ冬で気温は低いが、日脚が伸びて空が明るくなり、屋根の雪から最初の水滴が日に輝いて落ちる、それが「光の春」の始まりだ」と描写している。光の春の写真を撮りに北浦を訪ねてみた。

2月に入るとスズメやウグイスたちも声変わりして、異性を呼び、縄張りを宣言する独特のさえずりを始めるという。光の春は人々の思いだが、小鳥たちにとっては恋の季節の到来なのだろうか。

厳しい寒さが続いた。1カ月予報によると2月は一時的に寒い日もあるが平年並みになりそうだ。そろそろ花粉が飛び始める。ご用心を。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)